

# 校 園 名：東京大学教育学部附属中等教育学校

所在地：〒164-8654 東京都中野区南台1-15-1 電話番号：03-5351-9050

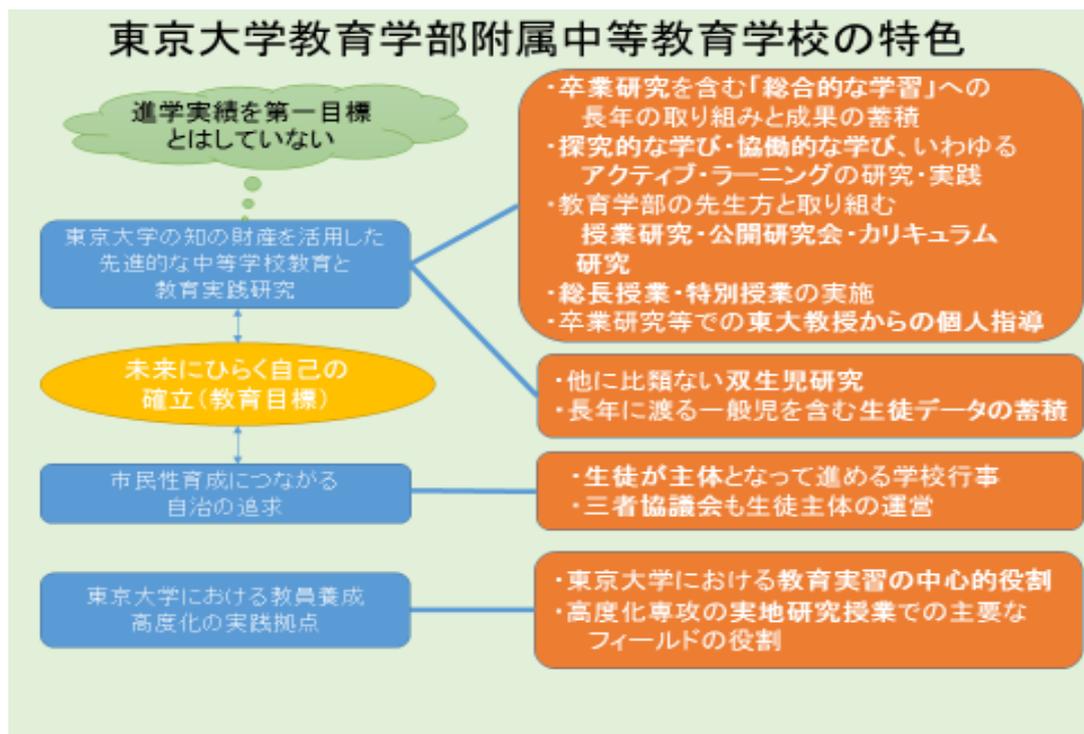
記載日：平成28(2016)年5月20日 記載者：沖濱真治 記載者役職：後期課程副校長

## 本校の校風、おおまかな特色について：

本校は旧制の東京高校を母体として、戦後の昭和21(1946)年に新制中学・高校として創立以来、約70年に渡り中高一貫教育を行ってきた学校です。平成12(2000)年の中等教育学校への改組以降も含めて、一貫して進学実績の向上を第一目標にするのではなく、東京大学の知の財産を活用しながらの先進的で本物の中等教育の実践・研究と、市民性育成につながる自治の追究を2本柱に、「未来にひらく自己の確立」を教育目標として学校づくりをすすめています。なかでも教育学研究科・教育学部の先生方からのサポートをいただきながらの「協働的な学びを通じて深く学ぶ」いわゆる「アクティブ・ラーニング」の実践と研究、「卒業研究」を含む1～6年生までの系統的な「総合的な学習」への取り組み、創立直後からの「双生児枠」選抜を設けての「双生児研究」、生徒・教員・保護者で学校の課題について考える「三者協議会」の実施など、時代を先取りした教育実践・研究に取り組んできたと自負しています。

こうした中で毎日生活しているためなのか、気さくで伸びやかな生徒たちが多く、また学年が上がるにつれ生徒同士、生徒と教員の関係が一層良好になり、普段の授業も時には活発な意見交換をしながら、時にはじっくりゆっくり思考しながらすすめられ、教えている教員自身も楽しみながら授業を行っている姿が印象的です。

なお本校は東京大学の教員養成とその高度化の拠点でもありますので、教育実習オリエンテーション、教育実習、大学院実地研究授業等での授業参観、教科教育授業の担当、教職実践演習授業の担当など、年間を通して、教育学研究科・教育学部と連携しながらその実施と改善にも積極的に取り組んでいます。



### 本校の卒業生の活躍状況について：

卒業生についての追跡調査はこれまで特に行ってきではありませんが、文化祭の際など、折にふれ学校を訪問してくれる卒業生は多くいますので、その後の様子を聞き、教員同士で共有しています。また、在校生対象の進路講話や、受検生とその保護者対象の学校説明会では、卒業生から在校時の様子や現在の活躍についてお話をしてもらっていますので、そうした方から、卒業生本人や同級生の様子をいつも聞いています。なお、本校では第3期中期目標・中期計画に関わって、全卒業生にも協力を得るようお願いしながら、また東京大学教育学研究科・教育学部の先生方にもサポートをいただいて、東大附属での教育効果についてのなんらかの形で検証を計画中です。

### 本校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

本校の教員は東京大学独自採用のため、該当する教員はありません。

### 魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

①本校では、教育学研究科・教育学部の先生方にサポート・参加していただきながら、平成17（2005）年度から「協働的な学びを通じて深く学ぶ」ような、すなわち最近では「アクティブ・ラーニング」と呼ばれて注目されている授業の実践と研究を続けて参りました。研究部が中心となり、全教員でを中心に、時には学年単位で、教科の枠を超えて、公開された授業で生徒がどのように学び、変容をしているのかを議論する授業検討会を定期的に行い、深い学びの実現を目指しています。この他に教科内での検討会も行っています。授業検討会については、年度のテーマを決め、まとめとして毎年2月に行われる公開研究会でも全教科で授業を公開し、参加してくださった先生方と意見交換をしています。公開研究会については地元中野区の公立小中学校の先生方については招待参加をしていただいています。この研究を通じて、「協働的な学び」の積極的な意義を感じている生徒には、学校への適応性が高いこともわかってきました。さらに本校は平成28（2016）年度からの『「総合的な学習」と教科学習を、「市民性」「探究」「協働」の視点で見直し結びつけ、そこでの「ディープ・アクティブ・ラーニング」を可能にするカリキュラムの開発と、その指導・評価方法の研究』という研究課題での文部科学省への研究開発学校申請を行い受理されましたので、どうすればこうした学びが実現し、また生徒にどのような効果を与えているのかを実証的にも明らかにし、多くの学校での授業改善に寄与していきたいと考えています。



②本校は、昭和41（1966）年に「特別学習」の名称で、今の「総合的な学習の時間」にあたる、教科の枠を超えて探究的で協働的な学びを目指す授業を導入しました。中学校、高等学校への「総合的な学習の時間」の導入（平成12（2000）年）に30年以上先駆けての実施開始であったわけですが、現在では、1・2年生での「入門1・2」、3・4年生での「課題別3・4」、5・6年生での「卒業研究5・6」という授業となっています。「入門1・2」においては、与えられるいくつかのテーマについて、主にグループやクラス全体で、フィール

ドワークを含む調査・研究・発表活動を行い、各テーマについて深く学ばせるとともに、探究的な学びを実現するための学び方・スキルについても学ばせています。「課題別 3・4」においては、「自然・環境」、「人間・社会」、「科学・産業」、「創造・表現」の4つの領域からなる13～15程度のテーマ別講座の中から、生徒に1講座を選択させ、3・4年生が一緒になって、そのテーマについて、フィールドワークを含む調査・研究・発表活動を行いながら、深く学ばせることをめざしています。「卒業研究 5・6」においては、各生徒に5年生・6年生



を通じて一つのテーマを設定させ、担当教員の指導の下に調査・研究・発表活動を行いながら、個人テーマについて深く学ばせ、最終的に卒業研究論文を提出させています。毎年、コンクール等で受賞するものもありますし、文化祭等で論文を直接見ていただいた方々からは一様に高い評価をいただいています。このように入學時から卒業時までの一貫カリキュラムの中で、自分で課題を発見し、興味を持って自主的に深く学び続ける姿勢とスキルを持った生徒の育成を目指しています。「アクティブ・ラーニング」が注目されている中、

本校での「総合的な学習」についても、他校の参考ともなるようさらに改善に取り組み、成果を発信していきたいと考えています。

- ③本校は創立直後から、入学検査に双生児枠を設け、一定人数の双生児（三つ子も含む）を入學させ、双生児研究を続けてきました。双生児に関係するデータから、ヒトの持つ様々な特徴への「遺伝と環境」の影響についての調査を進め、それを広く教育一般に役立てることを目的としています。開始以来70年に渡り、965組におよぶ双生児（2組の三つ子を含む）



の学力、運動能力、性格、健康等に関するデータの蓄積を行ってきており、これは世界に類を見ない貴重なデータとなっています。現在これらのデータをもとに、教育学研究科・教育学部と連携して、双生児・一般児双方を含む包括的なデータベースを構築し、双生児研究の拠点づくりを目指しています。またここ数年は、校内の双生児研究委員会を中心に国内外の学会でも発表をさせていただいており、その研究成果を世界に発信しています。

### 地域において、現在、本校はどのような存在であるか：

本校施設の一部は災害時の広域避難場所ともなっていますので、本校が位置する中野区や地域住民の皆さんとの関係は、非常に重要です。大きな行事の際は町内会の方々にもお知らせし、密接な協力関係をつくっていくよう努力しています。

平成25（2013）年度に本校の運動施設が改修された結果、現在は区内を初め近隣地域の運動系の部活動の大会会場として、充実した運動施設利用希望が多く、本校教員もそれに応えて大会会場校を引き受けることが多く、大変喜ばれています。

授業に関しては、2年生の「総合的な学習の時間」としての「入門2」での「半径2km 研究」において、地域について自分たちで調査学習を行っており、その中で地域についての理解と交流を深めています。また「家庭科分野」での保育園見学の中で、地域の保育園を訪問させていただき、保育体験学習もさせていただいており、保育園の園児の皆さんが近隣散歩で来ることもあります。

教育研究活動面では、最近では平成 26（2014）年度に文部科学省委託事業「言語活動の充実に関する実践研究」を中野区立小学校 2 校に協力校になっていただく中で受託し、共同研究をすすめることができました。これをきっかけに、本校での中野区立小学校校長会研修会の実施、本校からの中野区立小学校校内研修会への講師の派遣等、これまでより地域の学校との関係が深まりました。

今後も中野区、地域の方々と連携を取りながら広範囲な協力関係をつくっていきたいと思います。

#### 附属学校の存在意義、本校の存在意義について：

先に説明させていただいたように、本校での長期にわたる協働的で主体的な学び、すなわち「アクティブ・ラーニング」に関する教育実践研究への取り組みに注目いただいて、毎年、外国を含め多くの方に見学に来ていただいています。公開研究会へも毎年 300 名前後の方が参加してくださっていて、研究成果を発信しています。本校の「総合的な学習の時間」についても 3・4 年生の「課題別学習」に係る平成 26（2014）年度のシンポジウム『アクティブ・ラーニングの可能性とその条件－探究的学習の視点から』（会場：東京大学）での生徒を含めた発表、平成 27（2015）年度東京大学海洋教育フォーラム『海と人と－海と人との関わりを探る／ディープ・アクティブ・ラーニングの方へ』（会場：東京大学）での同じく生徒を含めた発表、卒業研究については平成 26 年度の日本発達心理学会第 26 回大会における生徒発表、平成 27（2015）年度の『高校生と大学生の探究成果ポスター発表会』（会場：京都大学）での発表、あるいは毎年各種コンクールでの受賞等、学習の成果も幅広く発信しています。さらに双生児研究についても、平成 25（2013）年度の『ふたごと教育』の出版、平成 26（2014）年度のブタペストでの第 15 回国際双生児学会、平成 27（2015）年度の国際ツインレジストリーネットワーク会議、日本双生児研究学会での発表など、積極的に発信を続けています。全国の学校、研究者にも参考にしていただけるような成果の発表を行うことは国立大学附属学校の任務の一つであり、本校もその一端を担っていると自負しています。

このように教育研究校である本校ですが、教育実践研究は発信や研究のための研究ではなく、まずは本校に在籍する生徒に、一生涯に生きる本物の力を育成し、まっとうな大人に育てていくことを目指して行うとともに、それを行っている私たち教員自身も、多くの方々と議論しながら改善を進めるなかで、結果として自分たちの教育活動の意味に自信を持ち、そして有意義な教育実践を社会全体に広げていくために行うものだと考えています。たしかに国立大学附属学校は地域の公立学校よりも恵まれた環境の中で教育活動を行っているかもしれませんが、それ故にやがて多くの学校にとっても役立つであろう教育実践研究をじっくり行うことができると言えないでしょうか。もちろん本校の教員も、そうした自覚を持って日々の教育実践と研究に取り組んでいます。

